

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2018～2022
 課題番号：18K10182
 研究課題名(和文)「研究指導能力自己評価尺度 - 看護系大学院修士論文指導用 - 」の開発と有効性の検証

研究課題名(英文) Development of a Scale to Appreciate Competency in Research Supervision for Theses and Verification of its Effectiveness of Appreciation Using the Scale

研究代表者
 中山 登志子 (Nakayama, Toshiko)
 千葉大学・大学院看護学研究院・教授

研究者番号：60415560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、研究指導能力の自己評価に活用可能な尺度の開発に向け、看護系大学院修士課程の指導教員10名を対象に半構造化面接を行い、研究指導経験を表す26概念を創出した。26概念とは、【論文完成に向けた授業時間内指導と個人教授】、【研究各段階への移行効率化に向けた学生への準備情報提供と助力者配置】、【学生の研究意欲持続に向けた努力の承認と激励】等である。26概念は、修士論文の指導教員が自身の指導を客観的に理解し、指導の質向上に向けた基礎資料として活用できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで修士論文指導に携わる教員の経験は、海外の先行研究により行われ、指導の特定の側面に焦点を当て一部の経験が解明されていた。一方、本研究は、修士論文とする研究の開始から論文審査まで修士課程の修了要件に不可欠な「修士論文完成」に関わるすべての経験を解明しており、これは本研究の独創性に値する。これら26概念は、修士論文指導に携わる教員の研究指導経験の総体を表しており、教員が自身の研究指導の状況を客観的に理解するために活用できる。また、これら26概念を基盤にした尺度の開発は、わが国の重要課題である国際的に通用する研究成果の産出と研究者の養成に貢献する。

研究成果の概要(英文)： To develop a scale that nursing faculty can use for self-evaluation of research supervision, through semi-structured interviews, data were collected from 10 nursing faculty who supervise master's theses research in Japanese graduate nursing programs and 26 concepts emerged as describing the nursing faculty's experience of supervising master's thesis research. These included 'in-class instruction and tutoring for completion of the master's thesis', 'provision of preparatory information and assignment of assistants to graduate students to implement an efficient transition at each stage of their research', and 'recognition and encouragement of graduate students' efforts to continue their research motivation'. Nursing faculty can use the 26 concepts to objectively understand their own supervision of master's theses research and as a basic resource for improving their research supervision.

研究分野：看護卒後教育

キーワード：研究指導 修士論文 看護系大学院修士課程 経験 看護学教員 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

グローバル化や知識基盤社会の進展に伴い、新たな社会の創造を牽引し国際社会で活躍するリーダーの養成が急務であり、人材養成機能をもつ大学院の果たす役割は、以前にも増して重要となっている。これを受け、文部科学省は、大学院教育の質の保証、向上に向け取り組むべき課題として、組織的な教育・研究指導体制の確立とともに、教員個々の教育・研究指導能力の向上を明示した(文部科学省,2011)。

わが国の看護系大学院修士課程は、1997年より毎年約10校ずつ増加しており、これによる教員数の不足や経験過少による教育への影響(石田他,2009)など深刻な問題に直面している。特に、修士論文指導に伴い教員が様々な問題に直面している状況(山下,2016)は、大学院の使命である高度な人材の養成に直接影響を及ぼす。このような現状は、看護系大学院においても、教員の研究指導能力向上への取り組みが重要な課題であることを示す。

大学院修士課程は、必要単位数の修得と修士論文等の審査及び試験への合格を修了要件とする(大学設置基準第16条)。これは、修士課程の教員が「授業に必要な教育能力」と「研究指導能力」の両方を備える必要があることを示す。このような観点から先行研究を概観した結果、わが国の看護系大学院教育に関わる研究は、教育の現状解明(堤他,2015)やプログラムの評価(亀井他,2013)など「授業に必要な教育能力」向上に資する研究を中心に進展し、「研究指導能力」に関わる研究は未着手であることを確認した。このような状況は、わが国の看護系大学院における教育が他の学問領域に比べ歴史が浅く、これまで教員の関心の多くが「授業を中心とした教育能力」に集中していたことに起因する。

一方、海外では、「研究指導能力」に焦点を当てた研究が数件存在したが、それらは、学生の知覚を通して望ましい研究指導を解明(Lekalakala-Mokgele,S.,2008)したり、先行研究(Booi,H.K.,1997)の結果を基盤に研究指導の特徴を解明(Severinsson,E.,2012)しており、実際に修士論文を指導している教員を対象に研究指導に伴う経験を解明し、その成果を基盤に尺度を開発した研究は存在しなかった。

本研究は、看護学教育の先進国といわれるカナダ、オーストラリ、アメリカ合衆国に先駆け、これまで教員が個々に行っていた修士論文指導に伴う経験知を結集し、普遍的な成果として産出し、それを基盤に研究指導能力向上に資する尺度を開発する。本研究が焦点を当てる看護系大学院教員の「研究指導能力」は新たな研究領域であり、本研究課題は高いチャレンジ性を備えている。

また、本研究は、「自己評価」を研究の中核に位置づける。それは、自己評価が自分の学業や行動等の査定に止まらず、今後の学習や行動の改善までを含む概念であり(橋本,1983)、自己評価なくして教員個々による研究指導能力向上は不可能なためである。本研究が開発を目指す「研究指導能力自己評価尺度 - 修士論文指導用 -」は、研究指導経験の多少に関わらず、あらゆる教員が自身の研究指導能力向上に向け必要な課題を見出すために活用できる。このような尺度の開発は、看護学研究指導に携わる教員のみならず、他学問領域にも波及する可能性が高く、わが国の重要課題である国際的に通用する研究成果の産出と研究者の養成に貢献する。

【引用文献】

- 文部科学省(2011)：第2次大学院教育振興施策要綱。
- 石田貞代他(2009)：専門看護師教育課程をもつ看護系大学院の現状と課題に関する調査研究，山梨県立大学看護学部紀要，11，87-94。
- 山下暢子(2016)：修士論文の研究指導上直面した問題とその克服，看護教育学研究，25(2)，24-25。
- 堤千鶴子他(2015)：目白大学大学院看護学研究科「コミュニティ看護学分野」の教育の現状と課題，目白大学健康科学研究，8，43-52。
- 亀井智子他(2013)：修士課程「チームビルディング力育成合宿セミナー」プログラムに参加した上級実践コース履修者のチームビルディング意識の変化とプログラム評価，聖路加看護大

学紀要, 39, 36-46 .

Lekalakala-Mokgele, S. (2008): Expectations of postgraduate nursing students: an inquiry, *Curationis*, 31(3), 44-50.

Booi, H. K. (1997): Style and quality in research supervision: the supervisor dependency factor, *Higher Education*, 34, 81-103.

Severinsson, E. (2012): Research supervision: supervisory style, research-related tasks, importance and quality-part 1, *Journal of Nursing Management*, 20, 215-223.

橋本重治(1983)：教育評価基本用語解説，「自己評価」の項，指導と評価，29(8) ，38 .

2 . 研究の目的

研究指導能力向上に向け、看護系大学院に就業し修士論文指導に携わる教員が、研究指導能力を自己評価するために活用可能な尺度を開発することである。

この目的を達成するために、以下の成果を産出する。

- (1) 看護系大学院に就業し、修士論文指導に携わる教員の研究指導経験を表す概念を創出する。
- (2) (1)の研究成果を基盤に、修士論文指導に携わる教員が、自身の研究指導能力を確実に向上させるために活用可能な自己評価尺度を開発する。

3 . 研究の方法

- (1) 看護系大学院の修士論文指導に携わる教員の研究指導経験を表す概念の創出

研究方法論に看護概念創出法(舟島,2010)を適用した。看護系大学院に在籍し、修士課程の指導教員として過去5年以内に1名以上の修了生を輩出している看護学教員10名を対象に半構造化面接を行った。データ収集期間は、2018年1月から2019年3月であった。収集したデータを質的帰納的に分析し、研究者間の合意が得られるまで分析を繰り返し研究の信用性を高めた。

- (2) 「研究指導能力自己評価尺度 - 修士論文指導用 - 」の開発

質問項目の作成

尺度開発に先立ち尺度仕様書を作成し、<能力を測定する質問項目作成の方針>に基づき、「看護学の修士論文を完成に導く教員の研究指導能力」に適合する行動として、24 質問項目を作成した。

尺度検討会とパイロットスタディによる尺度の修正

質問項目の適切性や代表性、教示文の適切性などを検討するため、複数の大学院に在籍し、職位や専門領域の異なる4名の教員を対象に尺度検討会を開催した。会議の結果に基づき、教示文と質問項目の表現を洗練するとともに、回答の容易さを考慮し質問項目の順序を一部変更した。

次に、この尺度を用いて、パイロットスタディを実施した。往復葉書を用いて調査協力を依頼した47大学院のうち、承諾の得られた20大学院に質問紙110部を送付し、41部(回収率37.3%)を回収した。看護職以外の者が回答した2部を除いた39部のうち、38部は全質問項目に回答があり、修正は不要であると判断した。また、回答には5段階全ての選択肢が用いられており、選択肢が適切に設定されていることを確認した。さらに、尺度総得点が正規分布を示すことを確認した。

尺度の信頼性・妥当性の検討に向けた全国調査

全国の151大学院の研究科長宛に往復葉書を用いて、1次調査および2次調査を依頼した。データ収集期間は、2022年4月から2022年12月であった。

[引用文献]

舟島なをみ(2018)：看護教育学研究 - 発見・創造・証明の過程 - 第3版，医学書院，120-198 .

4. 研究成果

(1) 看護系大学院の修士論文指導に携わる教員の研究指導経験を表す概念の創出

対象者 10 名は全て女性であり、年齢は 40 歳台 1 名、50 歳台 6 名、60 歳台 3 名であった。職位は、研究科長 1 名、教授 6 名、准教授 3 名であり、専門領域は、成人看護学、小児看護学、精神看護学、地域看護学、病態学等を含み多様であった。修士課程の指導経験年数は平均 7.7 年 (SD=5.3) であり、輩出した修了者数は 1 名から 15 名であった。対象者 10 名が在籍する大学院は、国立 4 名、公立 5 名、私立 1 名であった。

対象者 10 名の面接データを質的帰納的に分析した結果、修士論文指導に携わる教員の研究指導経験を表す 26 概念を創出した。26 概念とは、【1. 論文完成に向けた授業時間内指導と個人教授】【2. 学生への連絡累次と連絡自粛】【3. 学生からの連絡長期待機による指導好機の逸失と指導機会の設定督促】【4. 研究各段階への移行効率化に向けた学生への準備情報提供と助力者配置】【5. 質的データ分析演示と分析結果修正の具体教示】【6. 学生の研究意欲持続に向けた努力の承認と激励】【7. 学生からの指導要請への即刻受諾と棄却】【8. 学生個別の学習機会設定による研究進行過程の困難最小化】【9. 学外研究協力者への円滑な対応に向けた学内関係者への学生行動周知】【10. 専門外の知識を要する学生への個人教授に向けた専門家の招聘】等である。

26 概念は、修士論文指導に携わる教員が、適切な時機に指導機会を設定し、学生の個別状況を考慮し研究の進行を支援するという経験を表す。その過程で、指導に難航しながらもそれを打開するための努力をしたり、専門家や審査委員など多様な人々と相互行為を展開しながら論文完成を支援するという経験を表す。そのような指導の成果として、学生の成長や自身の研究能力の向上を実感するという経験をしていた。これら 26 概念は、修士論文指導に携わる教員の研究指導経験の総体を表しており、教員が自身の研究指導の状況を客観的に理解するために活用できる。

(2) 「研究指導能力自己評価尺度 - 修士論文指導用 - 」の開発

< 1 次調査 >

調査への承諾の得られた 33 大学院に質問紙 222 部を送付し、有効回答 170 部を回収した。追加調査を実施し、新たに 17 大学院に質問紙 126 部を送付し、有効回答 33 部を回収した。

< 2 次調査 >

調査への承諾の得られた 54 大学院に質問紙 326 部を送付し、第 1 回 121 部 (回収率 37.1%)、第 2 回 106 部 (32.5%) を回収した。第 1 回と第 2 回の回答者が同一であることを確認できた有効回答 75 部を分析対象とした。

以上より、尺度の信頼性・妥当性の検討に必要な 241 データ (パイロットスタディにより収集した 38 データを含む) および、安定性の検討に必要な 75 データを収集できた。これらの標本数は、尺度の信頼性および妥当性の検討に向け、十分な大きさである。

本研究の遂行過程を通して、看護学教員の研究指導能力向上にさらに有用な研究成果として、修士課程および博士課程の両課程に必要とされる研究指導能力向上に資する FD プログラムの開発を着想した。このような FD プログラムを開発するためには、当初の計画「『研究指導能力自己評価尺度 - 修士論文指導用 - 』の開発と有効性の検証」に止まることなく、同様の方法論を適用した博士論文指導能力自己評価尺度を開発し、2 種類の尺度を用いた診断結果に基づく FD プログラムの開発を包含する研究に進展させる必要がある。そこで、研究計画の拡大に向け、研究計画最終年度前年度に応募し、現在、基盤研究 B において研究を継続している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中山登志子, 舟島なをみ	4. 巻 46
2. 論文標題 看護系大学院の修士論文指導に携わる教員の研究指導経験の概念化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山登志子, 舟島なをみ
2. 発表標題 看護系大学院の修士論文指導に携わる教員の研究指導経験の解明
3. 学会等名 日本看護科学学会第41回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

中山登志子：修士課程の「研究指導」の改善に向けた研究成果の活用と看護卒後教育研究への着手，看護教育学研究，28(2)，26-27，2019．
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	舟島 なをみ (Funashima Naomi) (00229098)	清泉女学院大学・看護学部・教授 (33605)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松田 安弘 (Matsuda Yasuhiro) (10290545)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授 (22304)	
研究協力者	山澄 直美 (Yamasumi Naomi) (50404918)	長崎県立大学・看護栄養学部・教授 (27301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関